

■ 足元のドル安は単に感謝祭前の調整か？

前回更新分の本欄で、ドル/円について「一目均衡表の週足『雲』上限が下値をガッチリと支えており、当面は同水準が下値サポート役として機能し続けるかどうか注目しておきたい。仮に下抜けた場合は、一つの重要な節目である62週移動平均線（62週線）を試す可能性があると思われる」と述べた。



そして案の定、今週のドル/円の週足ロウソクは週足「雲」上限を下抜ける動きとなり、昨日（27日）は一時的にも62週線が位置する150.42円処を試す動きを見せている。昨年12月安値が62週線に下支えされた（左図参照）ことを考えると、当面は62週線が下値サポートとして意識されやすくなると見ておきたい。

昨日の安値（=150.45円）は、11月15日高値=156.75円処から6円以上も円高方向に振れた水準であり、やはり「何が足元の円高・ドル安を加速させたのか」については、ここであらためて整理しておくことが重要と思われる。

それは、一つに本日（28日）の「感謝祭」を前にドルロングの調整が強まったことが大きいと見られる。結果、ドル/円の日足ロウソクが今週26日に長らく下値を支えていた21日移動平均線を下抜け、昨日は200日移動平均線をも下抜けるなど、テクニカル的にも弱気の展開となってきたことは見逃せない。

もちろん、トランプ次期米大統領が突然、自身のソーシャルメディアに就任後の関税強化の方針を書き込んだことにより、市場全体にリスク回避ムードが広がったことも強い円買いの動きにつながったと見ていいだろう。

ただ、目下の市場では12月の米連邦公開市場委員会（FOMC）における追加利下げ観測がジワリと後退していることも事実である。その証拠に、このところの米国債市場では2-10年債利回り格差の縮小傾向が強まっている。つまり、政策金利に敏感な米2年債利回りが一頃よりも強含みになってきているわけである。

昨日発表された10月分のPCEでデフレーターを見ても、米連邦準備理事会（FRB）が重視しているコア指数が前年比+2.8%と前回よりもやや上昇しており、これはFRBに「追加利下げは慎重に」とのプレッシャーになり合える。そうでなくとも、トランプ氏が掲げる次期政権の政策方針はどれもこれもがインフレを促進させやすい内容であると考えられ、FRBとしても追加利下げの判断には慎重にならざるを得ない。

一方、先週は植田日銀総裁の発言に市場の注目が集まったものの、その内容は多くの市場関係者に肩透かしを食らわせるものとなり、市場では日銀による12月追加利上げ観測がやや後退している模様である。ちなみに、日本の10年物国債利回りは先週21日に一時1.10%まで再浮上していたが、その後はやや気迷い気運が漂う状況となっている。

つまり、目下は米国の追加利下げも日本の追加利上げも可能性としては5分5分と見る向きが大勢を占めており、本来はドル/円の方向感が乏しくなりやすい。それにも拘らず、ここ数日は少々キツイ下げを演じたことから、当面は下げ過ぎの修正が生じる可能性もあると見られる。

今週に入ってユーロ/ドルに一定のリバウンドが生じているが、これも単に感謝祭前のポジション調整の結果である可能性がある。よって、ここは感謝祭後にドルの揺り戻しが見られるかどうかを慎重に見定めたいところと言える。

（11月28日 10:45）